

ホフマン 「李煜の詞——中國歌詩の藝術性について
の手引きとして——」

ケルン グレーフェン出版社 一九五〇年 二七四
頁

Alfred Hoffmann, Die Lieder des Li Yü (937-
978), Herscher der südlichen T'ang Dynastie.

—— Als Einführung in die Kunst der chinesischen
Lieddichtung. Köln: Greven Verlag, 1950. 274 pp.

同「春花秋月——宋代の詞を附せる木版畫集——」

ケルン グレーフェン出版社 一九五一年 一二二
頁

Alfred Hoffmann, Frühlingsblüten und Herbst-
mond —— ein Holzschnittband mit Liedern aus
der Sung-Zeit (960-1274). Köln: Greven Verlag,
1951. 112 pp.

この二書はいずれもドイツ語による詞すなわち詩餘の翻譯

譯であるが、これまでに數少ない詩餘の歐米語譯として極めて優れたものであるばかりでなく、特に前者はその譯解において、廣くこれまでの中國古典詩詞の歐米語譯の中に全く見られなかつた獨特の方法を用い、しかも注目すべき成績をおさめている。

一般に詩の翻譯が散文の場合に比して困難であるというのは、韻律等外型上のことは論ずるまでもないとして、詩というものが、そのメデイアムである個々のことが示す事物よりも、そのことばによつて呼び起される連想暗示といつたものに依存する度合いが高いということが一つの大きな理由であらう。中國の古典詩の場合、この傾向は殊に強度であり、更に詩餘の場合は極端であるとすらいえよう。

その上に中國古典文學の一般的な特徴として極度に壓縮した簡潔な表現が尊ばれるという傾向が詩詞では更に甚だしい。こうした理由から中國詩の一句（それは殆んどが五言と七言の二種なのであるが）の意味するすべてを譯文の讀者に伝えようとするならば、極度のパラフレイズが必要であり、フォン・ツァッハ氏のあの老大な翻譯（註1）は

その代表的な例といえよう。J・ハイタワ―教授が評した（註2）ように彼は「西歐における最も多産にして正確なる中國詩の翻譯家」であり、「中國詩を研究しようとする歐米人に對して」偉大な業績を残したのであるが、その譯文は極端なバラフレイズの結果として譯文のみを讀む者には詩句の意味することは知り得ても、その詩句の詩情・詩境といった面については全く窺うことができない。ツァッハ氏の翻譯自體を詩として讀む者はいないであらうし、彼自身も恐らくはそれを期待していなかつたのである。しかしツァッハ氏の翻譯の方法は中國詩の歐米語譯の中ではむしろ特殊な位置を占めるものであつて、その他の大部分の翻譯家の方法は、なるべく平易な詩を選んで洗練された譯詩を作ること、このような場合譯詩の成功の度合はむしろ譯者の詩作能力にかかり、これまで實際に成功しているといえるものは必ずしも多くはないようである。A・ウェイリイ氏の翻譯（註3）などは彼の地で可成り好評を得ているようであるが、そうした比較的優れた翻譯の場合でも、それが中國詩そのものの詩情をどれ程傳えているかという

點になると、なお疑問が残るのは當然であらう。

ホフマン氏の「李煜の詞」は現存する李後主の詞四十五首のすべてに譯解を施したものであるが、その方法はこれまでの翻譯とは全く趣きを異にする。その譯解は一首毎に次の如き構成をもつてゐる。

- (1) Übersetzung (譯文)
- (2) Anmerkung (註解)
- (3) Inhalt (主題)
- (4) Interpretation (解説)

(1)の譯文は原詩の面影をできるだけ保存するために可能なる限りの逐語譯とし、ドイツ語の文章として成立させるためにやむをえず補つたことは括弧の中に入れて區別してある。同時に語序もドイツ語として可能なる限り原文の形を保存するように努めている。いわば日本における書き下しとよばれている方法に近いものである。

(2)においては各句ごとに(1)の逐語譯のみでは理解し難い語句について註解が施される。しかもそれは單に事物の説明にとどまらず、その語句のニュアンス、あるいはその語

句が讀者に期待しているイメージといったものについて、進んで分析的な説明を試みている。殊に詩餘に特有な連想や暗示力の豊富な語句については、ページを惜しまずに解説を加えてその語句の内包するすべてを讀者に理解させようとする努力がみられ、本書の大きな特長となっている。例えば第七首喜遷鶯の第四句「夢回芳草思依依」の註解に「芳草」「夢回」「依依」を次のように説明する。

芳草 „duftende Fluren.“ In der T'zu-Dichtung hat dieses Binom, das in den Elegien von Chi'u auf die hervorragende Tugend eines Mannes angewandt wird, sein moralisches Mäntelchen abgelegt und sich zu einem sehr wichtigen assoziationsreichen Ausdruck der unendlichen Sehnsucht nach dem geliebten Menschen entwickelt, der folgende Gedankengänge in sich schließt: Wenn im Frühjahr die Natur sich mit neuem Grün schmückt, wird der Gedanke an den fernem geliebten Menschen besonders stark. So weit die unendlichen, grünen und duftenden Frühlingsfluren reichen so unendlich weit schweifen auch

die sehnsüchtigen Gedanken zu dem Geliebten, Gatten, Bruder oder Kind, mit dem Ziele, die schönsten Tage des Lebens und des Jahres nicht in trauriger Einsamkeit und Verlassenheit zu verbringen, sondern in liebender Gemeinschaft die Blüten und das neue Grün zu genießen. 芳草 „frühlingsduftende Fluren“ schliesst also Trennung — Sehnsucht — Weite — Frühlingsglanz und Bangen um die Flüchtigkeit der schönen Dinge in sich. Ausdrücke wie 芳草夢 „Traum von frühlingsduftenden Fluren“ oder 落花夢 „Traum von fallenden Blüten“ beides Umschreibungen für den Traum zu dem geliebten Menschen in der Ferne, sind ausgesprochene Wendungen der T'zu-Dichtung, die auch in ihren ganzen Assoziationen typisch für diese Lieder sind. (p. 41, 42)

〔芳草(かぐわしき草原)〕楚辭において人の美德について用いられたこの言葉は、詞にみえては道德のイメージを脱いて、愛する人への限りない憧憬の、極めて重要な連想にとりも表現に成長した。それは次のような

思考経路を含んでいる。早春、自然が新たなる緑で装われる頃には、遠くにある愛人への思慕の情はことさらにつのつてくる。かぐわしい春の緑なす草原がはてしなく擴がつているように、愛人・夫・兄弟・子供への思慕の情は遙かにはてしなく漂う——一年の中の、また生涯の最も美しい日々を悲しい孤獨と虚脱の中に費やすことなく、愛する人とともに花を緑を楽しまんことを求めて。芳草（春の匂える草原）はそれ故、別離—憧憬—遙遠—春の輝やき—及び移ろいゆく佳きものへの不安——をその中に含んでいる。芳草夢・落花夢のごとき表現——この二つのことばは遠くにある愛人への夢を遠まわしに表現するものであるが、——それらは詞の優れた表現方法であり、それはさまざまに連想にとむ點で、これら抒情詩について典型的である。」

一々の語句についてのこのように丁寧な説明によつて讀者は詞の抒情性について可成り理解を深めるであろうが、更に次の(3)ではその一首の主題を簡単にまとめて中心を見

失なわないように注意を喚起し、最後の(4)では一首全體についての詳細なパラフレイズがある。ここでも詞にうたわれている事柄だけでなく、その詞のかもしれない詩情までも讀者に傳えようとする注意がはらわれている。繁を厭わず更に一例を挙げよう。

(第二十首、搗練子令)

深院靜、小庭空、斷續寒砧斷續風、無奈夜長人不寐、數聲和月到簾櫳、

INHALT; Einsame Herbstnacht.

INTERPRETATION; Die Atmosphäre verlorenen Stille und Verlassenheit zurückgegener Höfe wird mit einfachen Mitteln durch die Vernehmlichkeit des durch die glänzende Mondnacht weithingetragenen Schalles klopfender Waschschlägel geschaffen. Es wäre durchaus möglich, diese Dichtung statt auf den Dichter, auch auf eine einsame Schöne zu beziehen. — Abendliche Stille liegt über der tiefen Flucht der Höfe, und welterloren erscheint der kleine Hof, in den der Dichter sich zurückgezogen hat.

Nichts dringt zu ihm als nur der ferne, doch vernehmbare Klang und eintönige Rhythmus der Schlägel der noch in späten Abendstunden am Weidenufer des Stadtgrabens waschenden Frauen, — ein Klang, den dann und wann ein herbstlich-frischen Windstoß durch die klare, abendliche Kühle trägt. Wie stark bewegt in dieser Herbst-Mondnacht die Sehnsucht nach geliebten Menschen (Herinat usw.) seine Brust! Doch nicht ein Mensch, nicht ein trübslicher Gedanke verschafft ihm Ruhe in dieser unerträglich langen Nacht. Statt eines Trostes nichts weiter als das unablässig-monotone Pochen und der ferne Klang des Wascheschlägels, die mit dem kalten Silberglanz des Mondlichts, der nur die Wehnut und die Sehnsucht erweckt, in die verlorene Stille des Gemachs dringen. (p. 98)

〔主題 孤獨な秋の夜〕

〔解説 やるせないしずけさの蒙闇氣、奥まつた庭の孤獨が、月あかりを通り抜けて遙かに傳わつてくる砧の音を耳にするという單純な表現法で形成される。こ

の詩は詩人自身のこととせずにある孤獨な女性についての詩としてもよい。——夜の靜寂が奥深く連なる庭を掩う。詩人のひきこもつてゐる小さい庭は外界から切り離されてゐるかのようである。この夜ふけに城の外堀の、柳の木のある岸で洗濯してゐる女のうつ砧のかすかな響、單調なりズム——時折り澄み切つた夜の冷氣を吹き抜ける涼やかな秋風がもたらすその響だけが彼に迫つてくる。この秋さなかの月の夜、愛する人（故郷その他）への思慕の情がどんなに彼の胸をしめつけることか。だのに彼にはこの耐えがたい長夜にやすらいを與えてくれる人も、慰めとなるような思いもない。あるものはただ慰さめにあらずして悲しみと思慕をささう冷たい銀色の月の光とともに、この小室のやるせない靜寂にせまつて單調に響いてくる砧の音だけである。〕

こうして一首の詞についてこれらの各項を讀み合わせるることによつて、素養ある中國人が李後主の詞を讀んで感ずるであろう詩情をかなりの程度に理解することができるといふ。

このように詩の雰圍氣までを掘り下げて説明するためには、原詩についての通り一邊でない高度の理解と、その上に充分な表現力をもたねばならないが、ホフマン氏の場合、全體として注目すべき成功を示していると思う。彼の譯解が中國の詩について無智な人々に對して恐らくこれまでの歐米におけるどの翻譯よりも中國詩の境地をよく傳えているであらうし、更に原詩に接する人々にも極めて有益な助言を與えているであらうことを否定する人はあるまい。しかしながら個々の譯文又は註解をとり出せば妥當を缺くと思われるものもしばしば見受けられる。例えば

(1)、第十首子夜歌の第六句「禁苑春歸晚」の「春歸」を「春に人が歸る」という風に譯している [Im Frühling kehrt man spät vom kaiserlichen Park zurück (p. 51)] が、春が過ぎて行くのを「歸」という字で表現するのは詩詞においてごく普通のこととて、ここだけが例外である筈はない。

(春歸何處、寂寞無行路、若有人知春去處、喚取歸來同住
黃庭堅 清平樂。願春暫留、春歸如過翼 周邦彥 六醜)

(2)、第十三首更漏子の第三句「花外漏聲迢遞」において

「漏聲」を「雨のしたたる音」 [Draußen (bei den) Blumen das tropfende Geräusch (des Regens klingt wie) aus weiter Ferne und unablässig. (p. 55)] と解しているが唐突にすぎる。「漏聲」を「漏刻の音」という意味以外に使っている例を私は知らない。

次に解釋の原則的な面での不滿をつけ加えるならば、ホフマン氏は戴景素氏の編する「李後主詞」(註4)を底本としているが、戴氏は李後主の詞作を三つの時期――

- (1)、繼立小周后之前後——歡娛生活中的作品
- (2)、從善入朝至金陵失陷——外力壓迫下的作品
- (3)、北徙京師以後——俘虜生活中的作品

に分ち、個々の作品をその内容から推してそれぞれの時期に配している。この戴氏の配列は全く牽強附會であるばかりでなく、詩餘の理解鑑賞を甚だしく誤まるものである。

なぜなら、宋以後の詞では、ある場合には作品と事實との關係が明らかであり、時にはその事實を知らねばその詞を解し難いこともあるが、初期すなわち唐五代の詞では作者すら直ちに斷定できるものは少なく、まして世に傳えられる

本事のごときは概ね後人の附會にすぎない。更に詩餘の生命ともいふべきは、その極め難い無限定的な感情の世界であつて、個々の作品を強いて具體的な事實に結びつけるのは、不可能であるばかりか、却つて詩餘の生命を傷つけてしまふのである。ホフマン氏が戴氏のテクストを底本としてその時期區分をそのまま採用し、従つて解説において折り李後主の境遇（その多くは傳説にすぎない）と結びつけて説明している部分があるのは残念である。しかしそれらも彼の仕事の價値を損なつてしまふものではない。

更に此の書は李後主詞の完譯であるばかりでなく、詩餘についての文學史的解説、李後主の傳記、詞牌についての解説、李後主詞のテクストについての考察などが附されている。これらは從來の通説をまとめたもので、特に創見とみるべきものはないが、詩餘についてドイツ語で書かれたものとしては最もよく整つてゐるであらう。又最後の附録の中、各詞毎の語句の註解を一般的な形にまとめたものは、（註5）その獨特の説明方法により、いわば詞語解ともいふべきものとして參考するに足る。また同じく附録の中の

「李煜詞の翻譯の目錄」と「參考書目」の中の歐洲語の部分とは、これまでの歐米における詩餘の研究狀況を知るために便利な手がかりを提供している。また末尾に李後主詞の全文を附しているのもこれまでの歐米における翻譯には殆んどみられなかつたことである。

以上述べたように「李煜の詞」は詩餘の譯解として懇切丁寧をきわめ、しかも相當な成果をあげてゐるのであるが、中國語を解しない讀者にとつてこれを反覆玩味するのはやはり可成り根氣を要することと思われる。これに對し「春花秋月」は更に廣汎な讀者のために提供されたものであらう。この書は「中國版畫史圖錄」（註6）中に景印された「詩餘畫譜」（註7）より二十首（李景一首、范仲淹一首、宋祁一首、歐陽脩二首、王安石二首、蘇軾二首、黃庭堅一首、秦觀六首、趙令時一首、張孝祥一首、釋仲殊一首、李清照一首）を選んで翻譯し、木版畫の影印に添えたものであるが、なるべく解説を必要としない平易なものを選んだやうで譯文は極めて流暢である。しかもなお末尾に一首に

つき二頁から三頁程度の解説を附しているが、これも譯文の讀者ばかりでなく、原詞を讀む人にも一讀に價する。又木版畫の影印は非常に鮮明で彼の地の好事家の眼を樂しませてゐるであらうと想像される。

以上を以てホフマン氏の二書の紹介をおわるが、中國の古典詩はいわゆる漢詩として、日本では古くから親しまれて來たし、現在まで多くの學者によつて、研究上の業績は勿論、更に廣い讀者のための譯解も、歐米におけるそれらとは比べものにならない豊富なものがあるが、こと詩餘に關しては、ここに採り上げた二書に比肩すべきものを知らないのは甚だ残念である。

〔附記〕 この二書については既にハーバード大學のハイタワー教授の書評がある(註8)。

同教授の評は全體として適確で、此の稿を作るに當つても大いに參考にしたが、ただ作品を時期に分つことと作品を李後主の境遇と結びつけて解することを、一應は批判しつつも原則的に認めてゐる點は承服し難い。ホフマンが卷末に掲げた李煜詞の全文に

ついてこれ以上のテクストを求め得ないといつてゐるのも俄かには首肯しかねる。又この書評ではホフマンの二書と並べてこれらより少しく先に出版された李後主詞の英譯(註9)を評しているが、これはハイタワー教授も評しているように翻譯として特に成功を示しているものでもなく、殊にわれわれ日本人には何等參考すべき點を認めないのでここでは採り上げなかつた。

(註1) Erwin Ritter von Zach (1872-1942) は、その半生をスタヴィヤに隱棲して中國の古典詩をドイツ語に翻譯することに捧げた人である。その譯業は龐大な量に上るが、彼は當時の歐米におけるいわゆるシノログ達に容れられなかつたために出版機關に恵まれず、それらの翻譯はさまざま出版物に分散されたまま散佚しかかつてゐた。しかし數年前から哈佛燕京學社 Harvard-Yenching Institute によつて蒐集再刊が計畫され、すでに韓愈と杜甫の詩の全譯が出されてゐる。

von Zach, Han Yü's Poetische Werke, Harvard-Yenching Institute Studies III. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, 1952

——, Tu Fu's Gedichte I. II. H-Y. I. S. III. ——

前者には韓愈の全詩のほかに白居易、李商隱等十一人の唐代詩人の作品數十首の選擇が附載されている。ハイタワー教授の序文によれば、彼はこの他に李白詩と文選の大部分を翻譯してゐることであるが、それらは今のところわれわれには見ることができ

ない。

(註2) J. R. HIGHTOWER 前田 „Han Yu's Poetische Werke“ の序文。

(註3) Arthur WALEY, 170 Chinese Poems, 1918, New and corrected edition, 1927. More Translations from the Chinese, 1919. The Temple and Other Poems, 1923. The Book of Songs, 1937. etc.

また以上四種からの選集に

Chinese Poems, 1946.

がある。

なおこれらの翻譯についての研究として

森亮「アーサ・ウェーリーの中國詩賦英譯」(鳥根大學論集第一號)がある。

(註4) 戴景素編註「李後主詞」(學生國學叢書之一)商務印書館 民國十六年初版

(註5) VERZEICHNIS einiger für das Verständnis chinesischer Dichtung wichtiger Begriffe in den Liedern des Li Yü (p. 227~251)

(註6) 鄭振鐸輯「中國版畫史圖錄」上海良友復興圖書印刷公司 民國二十九年至三十三年出版

(註7) 詩餘畫譜一名草堂詩餘意、蓋本之草堂詩餘、擷取其尤粹者百篇、倩良工爲之作圖、一詞一圖、相映成趣……通計三本、凡得詞九十七篇、爲圖亦九十七幅、……而仍未能獲其全、……此譜

刊於萬曆壬子(四十年)、惜輯者汪氏未詳其名、(中國版畫史圖錄第二十一・二十二册說明)

(註8) Harvard Journal of Asiatic Studies vol. 15, June 1952. pp. 204~213

(註9) Liu Yih-ling and Shahid SOHRAWARDY, Poems of Lee Hwa-chu, rendered into English from the Chinese, with Chinese text, Calcutta, Orient Longmans Ltd. 1948. 79 pp.

(京都大學 村上哲見)